



Title	ブラジル・ポルトガル語の往来発着動詞の支配
Author(s)	鳥居, 玲奈
Citation	ブラジル研究. 2015, 11, p. 57-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106546
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ブラジル・ポルトガル語の往来発着動詞の支配

鳥居 玲奈

1. はじめに

Teyssier (2001) は、ヨーロッパのポルトガル語（以下 EP）とブラジルのポルトガル語（以下 BP）の間に見られる主な相違は音声・音韻面と語彙面にあり、形態・統語面での相違はさほど多くはないと主張する。実際、閉じた体系を成す文法上の変化というのは、開いた体系を成す語彙上の変化と比較した場合、それが日常的に口語レベルで起こっていたとしても、文語に反映されるまでにはある程度の時間を要してしまうがゆえ、その実態を捉えることは容易ではない。

現に、BP の規範文法書²には、現在においても EP の規範に沿った記述が多く見られ、実際にブラジルで使用されているポルトガル語の実態を反映しているとは言い難い。しかし、それによって BP で進行中である形態・統語上の変化を軽視し、単なる誤用として解釈するのは言語学的には問題である。

このような現状を踏まえ、とりわけ EP と BP で形態・統語上の相違が明白な言語現象を取り上げることにより、ブラジル・ポルトガル語独自の文法書の必要性を改めて認識するきっかけにしたい。中でも本稿では、往来発着を表す動詞と共に前置詞 *a*, *para*, *em* の使用に焦点を当て、これら 3 つの前置詞と言語内的・言語外的要因との相関関係について探ることを目的とする。

伝統的に、往来発着の動詞と共起できる前置詞は *a* か *para* とされ、*em* の使用は認められていない。ところが、ブラジルでは、高等教育を終えたいいわゆる *falante culto* と呼ばれる人々を含め、あらゆる階層のポルトガル語話者が、話し言葉では往来発着の動詞と前置詞 *em* を比較的高い頻度で使用している。この事実から、我々は、この使用が単なる誤用ではなく、何らかの規則性にしたがって生起するのではないかと仮定する。また、前置詞 *a* と *para* に関しても、BP における前置詞 *a* の使用は 19 世紀にはすでに減少傾向へと転じていることから³、本調査では前置詞 *para* の使用拡大が予想される。

本稿の構成は以下の通りである。第 2 節でブラジルの規範文法書、第 3 節で言語変異理論に基づく先行研究を取り上げ、それぞれにおいてこの問題がいかに関わっているのかを考察する。その上で、第 4 節にて、サンパウロ市出身の *falante culto* を対象としたインタビューをコーパスに仮説の検証を行うとともに、その結果が、近年ブラジルで出版されたポルトガル語学習者を対象にした語学教材にどの程度反映されているのかも併せて調査する。そして最終的に第 5 節で本稿の結論を述べることとする。

2. 規範文法書における扱い

本節では、ブラジルの代表的な規範文法書である Bechara (2003) と Cunha e Cintra (1991) に加え、記述文法的側面も併せ持つ Teyssier (1989) において、往来発着動詞に支配される前置詞がいかに関係しているのかを概観する。

Bechara (2003) によると、前置詞 *a* は多種多様な状況で用いられるが、そのうちの 1 つとして、*Nesse mesmo dia levei-os ao Banco do Brasil* のように、移動や距離を表す場合に用いられるという。前置詞 *para* についても *a* と同様に移動を表すものの、*para* は移動先での滞在に長時間を要する場合に用いられるという。一方、前置詞 *em* は、動作が向けられる場所を表すために用いられるとし、*Saltar em terra* や *Entrar em casa* 等の用例を挙げている。さらに、標準語では *vir* や *chegar* といった往来発着の動詞と *em* を用いることは認められておらず、代わりに前置詞 *a* が好んで用いられるという。これらの記述から、

Bechara の内容は以下の (B-1) から (B-3) に要約できる。

(B-1) 往来発着の動詞と共起できる前置詞は *a* か *para* である。

(B-2) *a* と *para* の違いは目的地での滞在期間にある。

(B-3) 往来発着の動詞と前置詞 *em* の使用は認めていない。

Cunha e Cintra (1991) は、ポルトガル語におけるあらゆる前置詞の体系的な分類を試みている。まずは、前置詞が「動き」を表す場合と「状況」を表す場合で二分割し、さらにそれぞれの項目に「空間」、「時間」、「概念」といった3つの下位区分を設けている。例えば、前置詞 *a* では、「動き」と「状況」のいずれをも表す場合があり、それぞれに「空間」、「時間」、「概念」を示す用法があるため、併せて6つの用法が存在することになる。

往来発着の動詞と共起する場合の *a* については、「ある地点への動き」を表し、さらに3つの下位区分のうちの「空間」を表すものとして分類されている。前置詞 *em* も *a* と同様に6つの用法を持つが、*em* は同じ「動き」でも「空間内のある地点を超える動き」や「ある空間内で何らかの状況に到達する動き」を表し、*a* と *em* が異なるのはこの点においてである。他方、前置詞 *para* には「状況」を表す用法はなく、3つの下位区分を備えた「動き」を表す用法しか存在しない。*para* の「動き」と *a* の「動き」の定義は酷似しているが、*para* には、「目的」や「展望」といった意味が加わり、さらに「動きの終着点」よりも「動きの方向」をより強調するという点において *a* と異なると言及されている。これらの Cunha e Cintra の記述を要約すると、以下の (C-1) から (C-3) となる。

(C-1) 往来発着の動詞と共起できるのは *a* か *para* である。

(C-2) *a* と *para* の違いは、前者は目的地がよりはっきりしているが、後者は目的地よりも移動の方向を表す。

(C-3) *em* は「動き」を表すものの、空間内部での動きに限定されている。

最後に、伝統的な規範文法書とは異なり、記述文法的側面も備えた Teyssier (1989) によると、ir, vir, voltar 等の往来発着を表す動詞とは、前置詞 a と para が共起するが、それぞれの用法は区別されるという。その相違は、“Ir a Paris”では、「パリに行き、戻って来る」が、“Ir para Paris”では「パリに行き、そこに留まる」といったニュアンスが含まれるという。また、em との比較においては、em は移動を伴わず、「ある場所に居る」ことを示す場合に用いられるのに対し、a や para は「ある場所へ移動する」ことを示す場合に用いられるという。しかし、動詞 chegar だけは、ポルトガルでは前置詞 a が用いられるのに対して、ブラジルでは頻繁に em が用いられると述べている。これらの記述から、以下のことが理解できる。

- (T-1) 往来発着の動詞と共起できる前置詞は a か para である。
- (T-2) a と para の違いは目的地での滞在期間にある。
- (T-3) 通常、往来発着の動詞には a や para が用いられるが、ブラジルでは動詞 chegar にはしばしば em が用いられる。

上述した文法書の記述内容は、最終的に以下の 5 点に要約できる。

- ① 往来発着の動詞と共起できる前置詞は a か para である。
- ② a と para の違いは目的地での滞在期間にある。
- ③ a と para の違いは、前者は目的地がよりはっきりしているが、後者は目的地よりも移動の方向を表す。
- ④ 往来発着の動詞は a や para と用いられ、通常、前置詞 em の使用は認められていないが、ブラジルでは動詞 chegar と em が用いられることがある。
- ⑤ em は「動き」を表すものの、空間内部での動きに限定されている。

動詞 *chegar* と前置詞 *em* が共起するという記述は、ブラジルの実際の使用を反映したものであろうが、その内容からは、*em* と共起できるのは動詞 *chegar* に限定され、その他の往来発着の動詞にはない例外的な扱いがなされていると言える。この記述のように、ブラジルでは動詞 *chegar* のみに *em* が用いられ、その他の往来発着の動詞には *em* が用いられることはないのであろうか。仮に、前置詞 *a*, *para*, *em* が用いられるとすれば、そこに何の規則性も存在しないのであろうか。これらの点を明確にする目的で次節より同テーマを社会言語学的視点から扱った先行研究を概観することにする。

3. 言語変異研究における扱い

本節では、言語変異研究の立場からポルトガル語の往来発着を表す動詞と3つの前置詞 *a*, *para*, *em* との相関関係について調査した研究を詳しく見ていくことにする。

前節で触れた規範主義的立場では、往来発着の動詞には前置詞 *a* か *para* が用いられ、その違いの1つは目的地での滞在期間にあることを確認した。これに対し、Bagno (2005) は、自らが行った調査からこの規範的立場を否定する結果を導き出した。

Bagno は、調査の対象とする動詞を *ir* と *chegar* に限定し、それぞれの動詞が要求する前置詞に続く名詞が以下の意味素性を含むか否かを調査した。

(a) [±*permanência*]

調査にあたり、まずは目的地での滞在を伴う場合には [+*permanência*]、反対に滞在を伴わない場合には [-*permanência*] で示し、規範文法書にしたがって前置詞 *para* に [+*permanência*] が用いられる場合と前置詞 *a* に [-*permanência*] が用いられる場合を標準的用法とした。一方、意味素性 [+*permanência*] に *a* が用いられている場合や、[-*permanência*] に *para* が用いられている場合、さらには滞在の有無にかかわらず前置詞 *em* が用いられている

場合を非標準的用法とした。その結果、口語レベルでは、*falante culto* でも全体のおよそ3分の2が非標準的用法を用いていたことを明らかにした。

[+*permanência*] のほとんどの場合に *para* が用いられていたことは上述した規範文法書が示す通りであるが、とりわけ興味深いのは、[-*permanência*] の場合には3つの前置詞が競合し、なかでも *para* の使用が際立っていたことである。非標準的用法とされた前置詞 *em* の使用も全体のおよそ2割観察され、それらは全て [-*permanência*] であった。ただ、この調査では、いかなる基準で [±*permanência*] が分類されたのかは明示されていない。

その点において、より明確な基準を示しているのは、このテーマの先駆的とも言える Mollica (1996) の研究である。Mollica は、調査の対象とする動詞を *ir* に絞り、リオデジャネイロ市の話し言葉では、*ir* が移動を表す場合にいずれの前置詞が用いられるかは、以下に示す名詞の意味素性が関係しているとした。

(b) [±*fechado*]

(c) [±*determinante*] , [±*definido*]

(b)の意味素性では、[+*fechado*] は閉じた空間を、[-*fechado*] は開いた空間を表している。空間の開閉の判断基準として、閉じた空間を「囲われた場所で、入り口があり、場合によっては天井があつたりなかったりする」とした。例えば、映画館、学校、スーパー、マラカナンスタジアムなどがこれに該当する。この基準から、ビーチや町などは開いた空間と分類できる。なお、医者、扉、街角といった抽象的な場所や不明瞭な場所については開いた空間として区別している。

一方、(c)の [±*determinante*] と [±*definido*] は、限定の度合いを表している。前者は前置詞に後続する名詞が限定詞を伴うか否かを、後者は話し手と聞き手にとってその場所が認識できるか否かをもとに以下のように分類される。

[+determinante, +definido]: 定冠詞、所有詞、指示詞が付与され、話し手と聞き手によって場所が認識される。

[+determinante, -definido]: 不定冠詞や不定代名詞が付与され、話し手と聞き手によって場所が認識されない、あるいは認識が困難。

[-determinante, +definido]: 限定詞は付与されないが、話し手と聞き手によって場所が認識される。例えば、国や州や町の名称など。

[-determinante, -definido]: 限定詞は付与されず、場所も限定されないため話し手と聞き手によって認識されない。

これらの意味素性をもとに Mollica (1996) が行った調査では、閉じた空間で、限定の度合いが高ければ高いほど、前置詞 *em* が用いられることが明らかになった。これは、前節の Cunha e Cintra (1991) の記述にもあったように、前置詞 *em* は「空間内のある地点を超える動き」に加えて、「ある空間内で何らかの状況に到達する動き」をも意味し得るがゆえに、限定された空間や閉じた空間に対して用いられるというこの調査結果は、理にかなったものだと言えるであろう。

上述した3つの要因に加え、Vieira (2010) は、往来発着を表す動詞と前置詞の間に語や句が挿入されているか否かもまた前置詞を決定づける要因の1つとした。動詞と前置詞の間に距離がなければ *a* または *para* が用いられ、反対に距離がある場合は *em* が用いられるという仮説を立てた。しかしながら、Vieira は仮説を立てるに留まり、実際にこの仮説の検証を行うには至っていない。

一方、Ribeiro (2008) は、ブラジル南東部のリオデジャネイロ州出身の *falante culto* を対象に実施したインタビューを分析し、言語内的要因については、Mollica (1996) と同様の結果を得た。言語外的要因については、男女それぞれ3段階の年齢層⁴に分類した上で、男性では、若年層が *em* を用いていたのに対し、年齢層が高くなると *a* または *para* を用いる傾向が見られたという。

女性では、若年層と高齢層で *em* の使用が見られ、中年層では *a* または *para* を用いる傾向があったと結論づけた。

Wiedemer (2008) でも、ブラジル南部のサンタカタリーナ州出身者を対象にしたインタビューを分析した結果、閉じた空間では *em* が選ばれ、反対に開いた空間では *para* が選ばれる傾向が見られたという。社会的要因については、出身地、年齢、学歴が前置詞の選択に影響を与える重要な要因であったと述べている。例えば、ブルメナウ市出身者では、高齢層は *a* を選択し、若年層は *para* を好んで用いていたが、フロリアノポリス市では、高学歴者は *a* を選び、シャペコ市では低学歴者は *em* を使用する傾向が見られたという。

社会的要因以外の言語外的要因として、Mollica (1996) は、文学部の学生 30 名を対象に、彼らがこの 3 つの選択肢をいかに捉えているのかという言語意識に関する調査を行った。すると、3 つの前置詞の中で、学生が「最も正しく」、「最も好ましい」と感じているのは、*a* であり、*em* は「間違い」で「最も好ましくない」と感じている選択肢であることが判明した。*para* はこれらの中に位置し、とりわけいずれの前置詞を用いるべきか疑問が生じた時には、中立的な前置詞として *para* を好んで用いるようである。

このように、往来発着を表す動詞には 3 つの前置詞が競合し、それらは以下のような言語内的要因によって決定され得るということが明らかになった。

- (a)目的地での滞在の有無
- (b)目的地が開いた空間か否か
- (c)目的地への限定詞の付与、話し手と聞き手に認識されるか否か
- (d)動詞と前置詞の間の距離

言語外的要因については、出身地、年齢、学歴、性別といった社会的要因に加えて、話者の言語意識もその選択を左右する重要な要因であると言える。

4. 調査結果と考察

本節では、これまで概観した先行研究の結果を踏まえて、以下に挙げた 2 種類のコーパスをもとに仮説の検証を行った。

- *A Linguagem Falada Culta na Cidade de São Paulo* (vol.1-vol.3)⁵
- *Muito prazer – fala o português do Brasil*⁶

便宜上、前者をインタビュー、後者を語学教材と呼び、次項よりそれぞれのコーパスごとに調査の結果をみていくことにする。

4.1. インタビュー

抜粋した用例は、往来発着の動詞 *ir, chegar, vir, levar, trazer, partir, voltar* と前置詞が共起し、さらに前置詞に後続する名詞（代名詞を含む）が明示されていたものである。本調査では、場所を表す名詞に限定することなく、いかなる名詞も含めるものとした。収集した用例の総数は 310 例であった。結果は表 1 に示した通りである。

表 1 : インタビューにおける往来発着動詞と前置詞 *a, em, para* の用例数

	その他の動詞							計
	<i>ir</i>	<i>chegar</i>	<i>vir</i>	<i>levar</i>	<i>trazer</i>	<i>partir</i>	<i>voltar</i>	
<i>a</i>	118	38	1	4	0	0	5	166
<i>para</i>	64	3	8	9	6	2	6	98
<i>em</i>	20	21	1	4	0	0	0	46
計	202	62	10	17	6	2	11	310
46								

上記の表から、動詞の内訳は *ir* の用例が全体の 65%、*chegar* の用例が 20% で、この 2 つの動詞が用例の大半を占めていたことがわかる。以下より、そ

それぞれの動詞ごとに結果を考察していくことにする。

4.1.1. 動詞 chegar

動詞 chegar では、全体の 61%が前置詞 a と共起していたが、前置詞 em の用例数も 34%と全体のおよそ 3 分の 1 を占めていたことに加え、前置詞 para の用例数を上回っていたことがその他の動詞とは異なる点であった。

また、先行研究では動詞 chegar と前置詞 para との使用に関する言及はなかったが、この調査では para と共起した用例も 3 例見つかった。⁷これらの用例では、以下のように、para に後続する名詞はいずれも [+humano] を有していた。

(1) Você chegava pra uma pessoa (vol.3, p.44)

全体的に動詞 chegar と生起していた用例では、conclusão, ideia, garantia, fim, fidelidade などといった抽象名詞が多く見られ、それらの大半には前置詞 a が用いられていた。

場所を表す名詞だけに限定すると、前置詞 a が 10 例で em が 12 例であり、その数はほぼ同数であった。

前置詞 a が選択された用例と em が選択された用例を比較すると、以下のよう同じ名詞・限定詞（定冠詞または不定冠詞）が用いられていた用例がいくつか見られた。例えば、(4)と(5)はいずれも 41 歳の男性弁護士の発話であるが、この男性は、インタビューの間、往来発着の意味で動詞 chegar を 4 回使用し、(4), (5)のように、前置詞 a と em を交互に用いていた。

(2) Lévi-Strauss... chegou ao Brasil com vinte e sete anos (vol.1, p.75)

(3) (o teatro) chega aqui no Brasil (vol.3, p.44)

(4) normalmente nós atravessávamos as cidades... até chegar a Los Angeles (vol.3, p.79)

- (5) quando se chega em Los Angeles (vol.3, p.82)
- (6) ela chegou a um ponto (vol.2, p.154)
- (7) senão ele chega num ponto ele estaciona... certo? (vol.2, p.99)

すでに触れた [±permanência] や [±fechado] といった言語内的諸要因との関連で前置詞 *a* や *em* の分析を試みたが、これらの要因によって前置詞が区別されていると断定できるまでには至らなかった。

まず、前者の目的地での滞在の有無については、確認が困難であった。その理由は、滞在の有無を客観的に判断する材料が不足しているためである。規範文法書などでは、*banheiro* であれば [-permanência] と判断できるがゆえに、通常は *ir ao banheiro* を使うなどといった説明がしばしばなされるが、どの程度の滞在時間を [+permanência] と判断するのかといった明確な客観的基準が設けられないゆえに、前置詞を選択する要因にこの意味素性を用いることは躊躇われる。それでも、前後の内容から長期滞在が予想される場合にいずれの前置詞が用いられているのかを探ったところ、*a* の使用と同様に *em* の使用も確認された。このような事実から、[±permanência] が決定的な要因になっているとは考えにくい。

次に、後者の要因においては、例えば、[+fechado] を備えた *loja* や [-fechado] を備えた *cidade* が前置詞 *a* と用いられていたように、[+fechado] の *escritório* や [-fechado] の *esquina* も *em* と用いられていたため、この要因も前置詞を選択する際の決定的な要因だとは言えない。

限定の度合いを測る [±determinante], [±definido] に関しては、前置詞 *a* でも *em* でも抽象名詞に [+determinante, -definido] が多く見られたという点では共通していた。場所を表す名詞は、大半が [+determinante, +definido] ないしは [-determinante, +definido] の意味素性を備え、前置詞が *a* であろうと *em* であろうと [+definido] であったといえる。

社会的要因との関わりでは、用例数やインフォーマント数自体がそれほど多くはなかったため、断定的な結果は出なかったものの、50代と60代の男女

で前置詞 a の比較的高い使用傾向が見られた。その他の年齢層では、全体として属性による違いというよりは、個人差が確認された。例えば、ある 40 代の男性経済学者のインタビューでは、chegar が 5 回生起し、それらに全て前置詞 em が使用されていたのに対し、30 代の女性教師のインタビューでは、chegar が 4 回生起し、いずれにも前置詞 a が用いられていた。この結果から、中年層では男性が em を好み、女性が a を好むと言えなくはないが、このように結論づけるには、更なる調査が必要となるであろう。

4.1.2. 動詞 ir

動詞 ir では、58%が a と生起していたが、para や em との使用もそれぞれ 32%、10%観察された。

いずれの前置詞にも共通して使用されていた名詞がいくつか見られた。例えば、casa や teatro は 3 つの前置詞とともに用いられていたが、中でも para との用例数が圧倒的に多かった。また、clube, escola, Politécnica, Rio de Janeiro, Europa, Estados Unidos は a と para で、cinema, espetáculo, Museu do Prado, Louvre は a と em で共通して使用が確認されたが、para と em だけで共通していた名詞は 1 例も見当たらなかった。

名詞によっては頻出していたものもあり、とりわけ cinema と teatro は前置詞 a と共起していた用例が合計 53 例見られた。上記の表 1 では、動詞 ir と共起していた前置詞は a が圧倒的に多いが、この 2 語の 53 例を除外すると、a の用例数は 65 例となり、a と para の総数はほぼ同数ということとなる。

前置詞 a と para の相違に焦点を当てると、a が用いられていた場合には、具体的な場所が示されていたのに対し、para は以下の用例でも確認できるように、抽象的な概念などに対しても多く用いられていた。

- (8) vai para o sexo... feminino... (vol.1, p.68)
- (9) vai para o gênero neutro em alemão (vol.1, p.68)
- (10) vou lá para o meu serviço (vol.2, p.63)

- (11) poucos vão para essa área científica (vol.2, p.81)
 (12) na hora em que ia para o ar *O Bem Amado*... (vol.2, p.245)

第3節で触れた諸要因とこれら3つの前置詞との相関関係に注目すると、すでに述べたように目的地での滞在の有無はここでも判断が困難であった。空間の開閉については、Belo Horizonte, Porto Alegre, Paris, Chicago, Nova Iorque といったブラジル国内外の地名と用いられていたケースが多かったが、とりわけいずれかの前置詞との共起が際立っていたわけではなかった。地名以外では、subúrbio, centro, estrada, interior, mar, caminho といった [-fechado] を備えた名詞は前置詞 *para* と共起していることが多かったのに対し、ópera, peça, igreja, exposição, hospital, mercado のように [+fechado] を備えた名詞には前置詞 *a* が比較的多数観察された。一方、前置詞 *em* が用いられていた用例では、以下に示すように、大半の用例で [+fechado] が確認できたと言える。

- (13) ia no correio... ((risos)) não é? (vol.3, p.80)
 (14) ah então a gente vai numa lanchonete é? (vol.3, p.121)
 (15) não queria ir :: nem à Politécnica nem no ITA (vol.3, p.154-155)
 (16) antigamente você ia no Cina Ipiranga (vol.3, p.117)

(15)では、場所を表す名詞 Politécnica と ITA が並列されているが、前者には前置詞 *a* が用いられ、後者には *em* が用いられている。これは、ITA が [+fechado] を有しているためだとも言えるが、動詞 *ir* から距離があるために *em* が用いられているとも考えられる。

限定の度合いについては著しい相違は見られなかった。

社会的要因との関連では、20代の男性同士のインタビューと20代の男性と女性のインタビューでは、移動を表す *ir* と前置詞の用例がそれぞれ6回、17回生起したが、一度も前置詞 *a* とともに用いられることはなく、代わって *para* や *em* が使用されていた。このことから、すでに先行研究でも度々指摘されて

いるように、本調査においても、若年層による前置詞 *a* の使用減少が確認できたと言えるであろう。

4.1.3. その他の動詞

その他の動詞との用例数は、全体の 16%と決して高い割合ではなかったが、その中でも一定の傾向が観察された。その傾向とは、それぞれの動詞によって用例数に多少の差はあるものの、*voltar* を除くと、*para* との使用が圧倒的に多かったというものである。*voltar* では、*a* と共起していた用例も *para* との用例とほぼ同数見つかった。また、数自体は多くはないが、*vir* や *levar* では *em* との使用も確認された。

前置詞 *a* との用例では、*Linguística*, *aquela época*, *vocações*, *coisas mais sérias* といった抽象名詞（句）が多く見られた。これらの大部分は動詞 *voltar* と使用されていた。一方、前置詞 *em* の用例は、全部で 5 例見つかったが、いずれの名詞も *casa*, *filial*, *escola*, *consultório*, *pasto* といった [+*fechado*] を備えていた。前置詞 *para* は、人や場所、また、閉じた空間や開いた空間といった様々な状況に向けられていた。

4.2. 語学教材

対話における実際の言語使用が、教育現場でどの程度反映されているのかを確認する目的で、語学教材 *Muito prazer* (2008) で往来発着の動詞 *ir*, *chegar*, *vir*, *levar*, *trazer*, *voltar* と前置詞 *a*, *para*, *em* が共起している全ての用例を対象に調査を行った。収集した用例の総数は 232 例であった。その結果は以下に示した表 2 の通りである。

表 2：語学教材における往来発着動詞と前置詞 a, em, para の用例数

	ir	chegar	vir	levar	trazer	voltar	計
a	84	9	1	3	0	0	97
para	112	0	5	4	3	7	131
em	1	3	0	0	0	0	4
計	197	12	6	7	3	7	232
				23			

ここでも、動詞 *ir* と *chegar* が全体のおよそ 90%を占めていた。しかし、*ir* が 85%を占めていたのに対して、*chegar* の割合は 5%に留まり、インタビューと比較するとそれほど高くはなかった。なお、その他の動詞は 10%であった。

最も割合の高い動詞 *ir* から見ていくと、前置詞 *para* との用例数が他の前置詞との用例数を大きく上回り、*em* の用例は 1 例のみであったことが表から見て取れる。*em* の用例については後述し、まずは *para* と *a* の用例について詳しく見ていくことにする。

本教材でもインタビューと同様、頻出していた名詞がいくつか見受けられた。例えば、*para* と頻繁に共起していた名詞は *casa*, *trabalho*, *escola* で、それぞれ 16 回、5 回、3 回確認された。これらの名詞と他の前置詞との用例は、前置詞 *a* が *casa* と共起した 1 例のみであった。反対に、前置詞 *a* と頻出していたのは *festa* で、その数は 14 回であった。*festa* がその他の前置詞と共起していた用例は 1 例も見当たらなかった。*cinema*, *academia*, *parque*, *shopping*, *praia*, *pizzaria* も繰り返し使用されていたが、いずれの前置詞ともほぼ同数回共起していた。

a と *para* の相違で最も顕著であったのは、*para* がブラジル国内外の地名と多く用いられていたのに対して、*a* はそれがほとんど見られなかったという点である。これは、目的地での長期滞在を示すために *para* が用いられ、短期滞在の場合は *a* が用いられるという規範文法書の記述内容に沿ったものだと

見方も可能であろう。しかしながら、前置詞 *para* の使用拡大が反映されているためだとも解釈できる。なぜなら、教材全体において、「どこ〜？」という問いに、「Aonde...?」よりも「Para onde...?」が頻繁に用いられていたことや、「Aonde você prefere ir no feriado? Pra praia ou pro interior?」のように、「Aonde...?」の問いに対しても *para* で答えているが、その反対は起こらなかったことなども、*para* の使用拡大の裏付けになると考えられるからである。また、Teyssier (1991) でも述べられていたように、*para* は「動きの終着点」よりも「動きの方向」を強調するがゆえ、[-*fechado*] を有する名詞と共にし易いと言えるであろう。

最後に、語学教材という規範的側面を持つコーパスで、間接的ではあるが、前置詞 *em* との使用が 1 例生起したということは特筆すべき事項であろう。ただし、この用例は、以下の(17)に示したように、前置詞 *em* が動詞 *ir* に直接支配されているのではなく、*para o Sul* という句のパラフレーズとして実現している。しかしながら、*em* が *ir* の支配であるということには相違ない上、Vieira (2010) が言及するに留まった動詞と前置詞との距離によって前置詞 *em* が使用されたとも考えられる。その特殊さゆえに、本調査では(17)も用例数に含めることにした。

(17) Você é que gosta de ir para o Sul, na casa dos seus pais. (p.344)

続いて動詞 *chegar* は、前置詞 *a* と *em* とのみ共起し、*para* との用例は 1 例も確認されなかった。そして、*em* の 3 例は、いずれも名詞 *casa* と用いられていた。*casa* が前置詞 *a* と共起することもなかったため、「家に着く」という場合には、BP では *chegar em casa* が一般化していると言えるであろう。それ以外では全て前置詞 *a* が用いられていたが、興味深いことに、不定代名詞が用いられていた 1 例を除くと、前置詞 *a* の後は全て男性名詞が用いられていた。当然、文法性としての男性は無標の性であるがゆえに偶発的に男性名詞が生起したとも考えられよう。しかし、見方を変えると、前置詞 *a* と女性定冠詞 *a*

とその縮合形である *a* は、BP ではいずれも同音異義語となるため、曖昧性を回避するための手段だとは考えられないだろうか。

最後に、その他の動詞では、大半が前置詞 *para* と共起し、前置詞 *a* が用いられていたのは、*minha casa, um teatro, uma assistência técnica, o hospital* の 4 例に留まった。これらの名詞（句）からも判断できるように、ここでは女性名詞も 2 例確認されたが、いずれも所有詞や不定冠詞とともに用いられ、女性定冠詞は一度も生起していなかった。このことから、前置詞 *a* と女性定冠詞 *a* との共起については、今後さらに検証が必要であろうと考えられる。

4.3. まとめ

以上のようにインタビューで収集した往来発着動詞と前置詞 *a*, *em*, *para* が共起した用例を調査・考察した結果、言語内的要因との相関関係は以下のよう要約できる。

- ・ 動詞 *chegar* では、前置詞 *a* と *em* が明確な区別なく広く使用されていたが、抽象名詞は *a* と頻繁に生起する傾向が観察された。場所を表す名詞では、前置詞が *a* でも *em* でも、話し手と聞き手がその場所を認識できるものが多かった。前置詞 *para* と共起していた用例は 3 例のみであり、いずれも人に対して向けられていたものであった。
- ・ 動詞 *ir* では、前置詞 *a* もしくは *para* との使用が一般的ではあったものの、*em* と共起していた用例もある程度の割合で確認された。*a* と *em* は、Mollica (1996) による閉じた空間、ないしは固有名詞を伴う具体的な場所に対して用いられていたが、*para* は空間の開閉のみならず抽象的な概念等に対しても区別なく用いられる傾向があった。
- ・ その他の動詞では、*para* と共起する傾向が顕著に現れた。動詞によっては *a* とも使用されていたが、その大半の場合は、抽象名詞に対して用いられていた。*em* が用いられる場合は、閉じた空間、ないしは具体的な場所に対して用いられる傾向があった。

言語外的要因に関しては、以下のような事柄が確認された。

- ・ 動詞 *chegar* では、50 代から 60 代といった高齢層の話者が前置詞 *a* を好んで使用する傾向が観察された。一部の中年層では、男性が前置詞 *em* を、女性が *a* を好んで使用しているように見受けられた。
- ・ 動詞 *ir* の用例では、20 代の話者は前置詞 *a* を回避し、好んで前置詞 *para* と *em* を使用する傾向が見られた。

語学教材では、往来発着の動詞と前置詞 *em* が共起していたのは、動詞 *chegar* との 3 例で、いずれも *casa* が後続していた用例のみであったが、動詞 *ir* との間接的な使用も 1 例確認できた。この結果は、規範による制約と実際の言語使用との揺れを映し出したものと言える。しかし、動詞 *chegar* 以外では前置詞 *para* が前置詞 *a* を凌駕していた点は、実際の言語使用に則したものだと考えられる。

5. おわりに

本稿では、往来発着を表す動詞と共起する前置詞 *a*, *para*, *em* と言語内的・言語外的要因との相関関係について考察した。一部の規範文法書では、BP における動詞 *chegar* と前置詞 *em* との共起については記述されていたものの、その他の往来発着の動詞と前置詞 *em* との使用は認められていなかった。しかし、実際の話し言葉を対象にした本調査では、*chegar* だけではなく、*chegar* 以外の往来発着動詞と *em* との使用も観察された。

第 3 節で取り上げた 4 つの言語内的要因のうち、目的地での滞在の有無については、本調査では確認が困難であったが、空間の開閉に関しては、先行研究と同様、前置詞 *em* が閉じた空間に対して使用される傾向が観察された。限定の度合いにおいては、本調査で収集した大半の名詞が [+definido] の意味素性を備えていたため、この要因がどの程度影響しているのかは厳密に確

認することができなかったが、前置詞 *a* や *em* が用いられる場合には、固有名詞のように具体的な場所が明示されている用例が多く見られた。最後に、Vieira (2010) が言及するに留まった動詞と前置詞との距離については、本調査では、インタビューと教材でそれぞれ1例ずつ見つかった前置詞 *em* が、この要因と関連している可能性が確認できた。

本調査における言語内的・言語外的要因と前置詞 *a*, *para*, *em* との相関関係から、最終的に、前置詞 *em* は、限定された空間ないしは閉じた空間に対して用いられる一方で、*para* は、空間の開閉や限定の有無が明確に区別されることなく用いられる傾向があり、若年層では *em* と *para* が頻繁に使用されるのに対して、高齢層では *a* を好んで選択する傾向があることから、*para* の使用が拡大し、とりわけ若年層からは *em* の使用も徐々に一般化している傾向があると結論づけられる。

しかしながら、BP 話者の言語意識では、規範的に正しいとされている前置詞 *a* と誤用だとされている前置詞 *em* との間には揺れがあり、言語使用域によってこれらを区別しているのではないかと考えられる。つまり、本調査で使用したインタビューのように改まった使用域では前置詞 *a* が、友人同士の会話のようにくだけた使用域では *em* が選択されるが、*para* はいずれの場合においても使用可能な選択肢として認識されているのではないかと考えられる。このことも BP における前置詞 *para* の使用拡大を裏付ける根拠となるであろう。

本稿では、BP の音韻的理由による前置詞 *a* の曖昧性を回避する手段として *para* の使用が拡大しているのではないかとの見方も示したが、この問題については稿を改めて検討することにした。

注

¹ 本稿で扱う動詞の支配 (regência verbal) とは、ある動詞が要求する前置詞のことで

ある。支配 (regência) の定義に関しては彌永(2014)を参照。

² ブラジルの教育現場で用いられる代表的な規範文法書として Bechara (2003), Cunha e Cintra (1991), Lima (2011) が挙げられる。

³ Guedes e Berlinck (2003) を参照。

⁴ Ribeiro (2008) の分類に従い、25 歳～35 歳、ないしはそれより若い年齢層を「若年層」、36 歳～55 歳を「中間層」、56 歳以上を「高齢層」と呼ぶことにする。

⁵ サンパウロ市出身者のうち、高等教育を修了したポルトガル語母語話者を対象に実施したインタビューを転記したもの。

⁶ 2008 年にサンパウロで出版されたポルトガル語学習者向けの教材。現代の BP に特徴的な用法を積極的に取り入れ、実践的なコミュニケーション能力を身につけることを目的に、およそ 450 頁にわたって、発音・語彙・文法の解説・練習問題が掲載されている。

⁷ Farias (2006) は BP における前置詞 *a, para, em* の用法について生成文法的視点から研究し、その中で、*O João chegou em Lisboa* は、ポルトガルでは非文であるが、ブラジルでは起こり得る構文であるのに対して、*O João chegou para Lisboa* は、ポルトガルでもブラジルでも非文であると述べている。

参考文献

BAGNO, Marcos. *Português ou brasileiro?: um convite à pesquisa*. 5. ed. São Paulo: Parábola Editorial, 2005.

BECHARA, Evanildo. *Moderna Gramática Portuguesa*. 37. ed. rev. e ampl. Rio de Janeiro: Editora Lucerna, 2003.

CUNHA, C.; CINTRA, L. *Nova Gramática do Português Contemporâneo*. 8. ed. Lisboa: João Sá da Costa, 1991.

GUEDES, M; BERLINCK, R. de A. Variação em complementos preposicionados no português paulista do século XIX. Estudos Linguísticos 32. Documento C198. htm. Publicação do Grupo de Estudos Linguísticos do Estado de São Paulo. 2003.

MOLLICA, M. C. de M. A regência variável do verbo *ir* de movimento. In: SILVA, G M. O.; SCHERE, M. M. (Orgs.). *Padrões sociolinguísticos: análise de fenômenos variáveis do português falado no Rio de Janeiro*. Rio de Janeiro: Tempo Brasileiro, 1996. p. 147-167.

RAMOS, E. P. O emprego de preposições no português do Brasil. In: TARALHO, F. (Org.).

-
- Fotografias sociolinguísticas*. Campinas: Pontes, 1989. p. 83-93.
- RIBEIRO, A. J. C. Variação e funcionalidade no uso de preposições e a regência do verbo *ir* na fala carioca. In: VOTRE, S.; RONCARATI, C. (Orgs.). *Anthony Julius Naro e a Linguística no Brasil: uma homenagem acadêmica*. Rio de Janeiro: 7 Letras, 2008. p. 87-94.
- FARIAS, J. G. Variação entre *à*, *para* e *em* no português brasileiro e no português europeu: algumas notas. *Letras de Hoje*, v.41, p. 213-234, 2006.
- LIMA, R. *Gramática normativa da língua portuguesa*. 49. ed. Rio de Janeiro: José Olympio, 2011.
- TEYSSIER, P. *História da língua portuguesa*. Tradução de Celso Cunha. 8. ed. Lisboa: Livraria Sá da Costa Editora, 2001.
- _____. *Manual de língua portuguesa*, Tradução de Margarida Chorão de Carvalho. Coimbra: Coimbra editora, 1989.
- VIEIRA, M. J. B. A influência dos fatores sociais na regência do verbo *ir*. *Nonada Letras em Revista*, v. 1, n. 15, Porto Alegre: Editora UniRitter, p.145-158, 2010.
- _____. Variação das preposições em verbos de movimento. *SIGNUM: Est. Ling.*, Londrina, v.12, n.1, p.423-445, jul. 2009.
- WIEDEMER, M. L. *A regência variável do verbo ir de movimento na fala de Santa Catarina*. Dissertação (Mestrado em Linguística) – UFSC, Florianópolis. 2008.
- WEINRICH, U.; LABOV, W.; HERZOG, M. Empirical foundation for a theory of language change. In: Lehmann, W. P.; MALKIEL, Y. *Directions for historical linguistics: A Symposium*. Austin: University of Texas Press, 1968, p. 95-195.
- 小池和良 (2004) 「スペイン語の前置詞支配」 寺崎英樹教授退官記念論文集刊行委員会『スペイン語学論集-寺崎英樹教授退官記念』p.54-62, くろしお出版.
- 彌永史郎 (2014) 「支配」 彌永他『ポルトガル語文法用語小辞典』 (<http://gelp.ciao.jp/GLOSSARIO/paginas/home.html>), 2015年2月27日取得.

參考資料

CASTILHO, A. T. de e PRETI, D. (orgs.). *A Linguagem Falada Culta na Cidade de São Paulo: Materiais para seu estudo – vol. I – Elocuções formais*. São Paulo: T. A. Queiroz/Fapesp, 1986.

_____. *A Linguagem Falada Culta na Cidade de São Paulo: materiais para seu estudo – vol. II – Diálogos entre dois informantes*. São Paulo: T. A. Queiroz/Fapesp, 1987.

_____. *A Linguagem Falada Culta na Cidade de São Paulo: materiais para seu estudo – vol. III – Entrevistas*. São Paulo: T. A. Queiroz/Fapesp, 1988.

FERNANDES, G. R. R.; FERREIRA, T. de L. S. B.; RAMOS, V. L. *Muito prazer: fale o português do Brasil*. 1. ed. São Paulo: Disal editora, 2008.